Kawara-Ban

名大病院 NEWS かわらばん

2017.01 103号

CONTENTS

① ・中部圏初の心臓移植実施施設に認定。重症心不全治療センターを開設しました。
・新年の御挨拶

② ・臨床心理士のご紹介
・診療科レポート「皮膚科」
・季節のお話／世界脳卒中デー
・ナディック通信

③ ・名大病院歴史探訪
・病院からのお知らせ／提案書からの改善報告
・ミニニュース
・携帯電話及びスマートフォンの使用について
・禁煙のお願い

④ ・医療の安全性・効率性を高める情報の集約と標準化を先導。
・平成 28 年度鶴舞公開講座を開催
・健康講座／「高齢者の虚弱(フレイル)って知っていますか？」
・ボランティアさん募集
・かわらばん HP のご案内

名古屋大学医学部附属病院

理　　念 ● 診療・教育・研究を通じて社会に貢献します。
基本方針 ● 一．安全かつ最高水準の医療を提供します。一．優れた医療人を養成します。
一．次代を担う新しい医療を開拓します。　一．地域と社会に貢献します。

〒 466-8560 名古屋市昭和区鶴舞町 65 番地　TEL 052-741-2111（代表）
http://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/

ホームページで「かわらばん」のバックナンバーがご覧いただけます

特集 TOPICS ① 中部圏初の心臓移植実施施設に認定。重症心不全治療センターを開設しました。

平成２８年 12 月 13 日、名大病院は中部圏初となる成人心臓移植実施施設に認定されました。認定に先立ち、１１月１日に重症心不全治療センターを開設し、心臓移植に向けての治療体制を整備しています。心臓移植実施施設認定によるメリットやセンターの特色について、センター長であり心臓外科長の碓氷章彦教授にお聞きしました。

中部圏初の心臓移植実施施設に認定

心不全とは、さまざまな原因によって心臓の機能が低下した状態を言います。心不全が重症化すると薬で治療しても回復が望めず、心臓移植が最後の治療手段となります。しかしながら、日本での心臓移植実施は年間40件ほどで、移植を待つ患者さんは年々増加。実施までの平均待機時間は約1000日というのが現状です。

そのため心臓移植適応と認められた患者さんには、心臓移植までの救命措置として植込型補助人工心臓（ＶＡＤ）治療を行います。本院は２０１３年に植込型ＶＡＤ治療の実施施設の認定を受けた後、17名の患者さんに植込型ＶＡＤ手術を実施してきました。こうした実績と体制が評価され、国内では10施設目、中部圏では初となる心臓移植の実施施設に認定されました。

重症心不全治療を一貫して提供

本院が心臓移植実施施設に認定されたことは、中部圏の重症心不全治療において大きな意味を持っています。これまで中部圏には心臓移植ができる施設がなく、本院の患者さんが移植を受ける際には東京や大阪の実施施設に送っていました。しかし、本院で心臓移植まで一貫して治療できるようになることで、地域の患者さんの負担を軽減できるものと考えています。

また、植込型ＶＡＤ治療においても、心臓移植実施施設から患者さんの心臓移植適応について承認を受ける必要があり、手続きに時間がかかっていましたが、これも院内を中心に対応できるようになるのでスピードアップが図れるはずです。

チーム医療の中心となるセンター

認定に先立ち開設したのが、重症心不全治療センターです。重症心不全の治療には、患者さんを継続して見守り、機器の管理などを行うご家族への教育も必要となるため、本院では多職種によるチーム医療を提供してきました。本センターは、このチーム医療の中心的な役割を担う組織で、循環器内科・心臓外科の医師、看護師、臨床工学技士が所属。心不全治療に関わる他科の医師や看護師、理学療法士、薬剤師、栄養士など多職種のスタッフと連携し、より良い医療提供を目指していきます。

今後は、治療を横断的に俯瞰できる移植コーディネーターの育成に力を入れ、人員の充実も図っていく予定です。内科治療から植込型ＶＡＤ治療、心臓移植までを担う重症心不全治療の拠点病院として、今春には体制を整え、新たな一歩を踏み出します。

新年の御挨拶

病院長　石黒　直樹

新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましては健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年、名大病院は全国４番目に臨床研究中核病院に選ばれました。国内での臨床研究の中核として活動するに相応しい体制があると評価されたのです。病院内にも我が国の臨床研究を牽引するという強い自負が感じられるようになってきました。今年もこの流れを受けて更に進めたいと思います。

本年度中には、患者駐車場の拡張工事が完了します。駐車場が不足し、周囲にお住まいの方々や患者さんに多大なる不自由をおかけしていましたが、今回思い切って拡大することにより不足状況は大幅に改善されるものと思います。これを手始めとして利便性の高い病院となるよう更に整備を進める所存です。

また、病院の国際標準化をめざして JCI（Joint Commision International）認証の取得を目標に活動しています。本年夏に模擬審査を受ける予定です。当院の存在目的である①医療提供機能の充実、②人材の育成、③高度医療・次世代医療のうち、人材育成がもっとも重要であることは繰り返し述べてきました。それには組織の基盤整備が必要で有ることは明白です。そこで平成30年の稼働をめざし、診療の基盤をなす、電子カルテの更新を進めています。最後になりますが皆様のご多幸を祈念して新年のご挨拶とさせて頂きます。

事務部長　吉田　勇人

新年明けましておめでとうございます。平成29年が皆様にとって素晴らしい１年となることをお祈りいたします。本年も名大病院は、より安全で質の高い医療を提供することに努め、その成果を新たな医療技術の開発や優れた医療人材の育成に役立てて参りたいと思います。

昨年は熊本県や鳥取県で大きな地震がありました。このような大災害時には、被災地の病院だけではなく、全国の医療機関が連携し、すばやく、かつ長期にわたって医療支援を行いましたが、各病院自身も災害に強く、被災しても自らの診療機能を維持し、医療活動を展開できるようにするための「災害時業務継続計画（BCP）」の策定が重要となっています。名大病院も BCP を策定し、そのような災害への備えに努めています。地域の皆様の安心に少しでも貢献できるよう取り組んで参りますので、皆様の御理解と御支援をよろしくお願い申し上げます。

看護部長　市村　尚子

明けましておめでとうございます。今年は酉（鶏）年です。酉（鶏）と言うと、私は時々「鶏が先か？卵が先か？」という言葉を使います。因果関係が判断できないような状況の比喩で、一方を支持すると、もう一方に矛盾ができるというジレンマを表す言葉です。医療においては、受け手側も、提供する側も、多くのジレンマを抱えます。私達、名大病院の看護師は今年も「愛（やさ）しく、温かく、安全な看護実践」を目指し、患者さんや関係者のみなさんとともに日々生じる多くのジレンマに向き合ってまいります。酉（鶏）は、古くは“夜明けを告げ、光の到来を告げる神聖な動物”として「古事記」の「天岩戸伝説」に登場します。スサノオノミコトを天岩戸からおびき出すことに使われた「常世長鳴鶏（とこよながなきどり）」のお話です。皆さんお一人おひとりにとって、夜明けを告げ、光の到来を告げる酉の年となりますようにお祈り申し上げます。

特集 TOPICS ②

臨床心理士のご紹介

精神科・親と子どもの心療科　臨床心理士　山内　彩

〝こころのケア〟という言葉を耳にする機会が増えて参りましたが、臨床心理士という病院スタッフのことはご存知でしょうか。

名大病院　精神科・親と子どもの心療科（児童精神科）に所属する臨床心理士は、乳幼児のお子さんから高齢の方々まで、発達やこころの問題を抱えておられる方や、そのご家族とお目にかかります。皆様とお話したり、お子さんと遊んだりする中で、或いは時に心理検査も用いて、発達やこころの状態を理解するように努めております。その上で、皆様のお気持ちや困っていることを整理し、対応方法をご一緒に考え、こころの健康の回復をサポートすることが主な役割です。

精神科のグループプログラムも担当しており、皆様と社会生活上のお困り・お悩みの事柄について話し合い、ご一緒に活動して、それぞれの患者さんがより良く生活を送れるようなサポートを目指しております。ご家族を対象とした勉強会では、こころの病気や治療についてご一緒に理解を深めていけるよう努めております。

また、からだの病気で治療中の方のこころの不調に対する相談にも、主治医から依頼を受けて応じております。例えば、総合周産期母子医療センターや小児科をはじめ、他の診療科で入院治療を受けておられる患者さんやご家族からの相談をお受けすることがあります。入院中、病気や治療のこと・今後のことについて考えているうちに、つらくなったり、不安になることもあると思います。そのような時、悩みや不安な気持ちをゆっくり話し、ご一緒に整理していくことで、つらい気持ちが落ち着き、こころにゆとりが出て、困っていたことが良い方向へと向かっていけるお手伝いができればと思っております。

こころの不調は、からだの不調に比べて、他の人には相談しにくいと感じがちで、お一人で悩みを抱えている方も少なくないのではないでしょうか。医師や他の病院スタッフとも協力しながら、患者さんやご家族が安心して入院生活や家庭生活が送れるように、少しでもお役に立てればと考えております。

季節のお話

世界脳卒中デー

脳神経外科　教授　若林　俊彦

皆さん、日々寒さが増してくる10月の末日に近い10月29日は“世界脳卒中デー”ということをご存知ですか。脳卒中は世界的にみても死因の上位を占めています。毎年、全世界では、1700万人以上の方が脳卒中で倒れ、その内の600万人の方は、十分な治療を受けられずにお亡くなりになっているのが現状です。なんとか命を取り留めたとしても、今現在でも、2600万人の方が脳卒中の後遺症に悩み、日々の生活を送っておられるのです。これは、２秒に一人の割合で脳卒中が発症し、６人に一人が生涯の間に脳卒中を経験する算定になります。脳卒中は、早く発見して適切な治療を素早く実施できれば大きな障害も残さずに助かることの出来る病気です。それではどんなことに気をつけていれば良いのでしょうか。そこには６つの鍵があります。

1）脳卒中の症状は、突然生じるからだの片側の麻痺やしびれ、あるいは言葉のもつれが多いです。いつもとからだの動きが違う、あるいは言葉が思うようにしゃべれないとなったら、すぐに病院を受診して下さい。

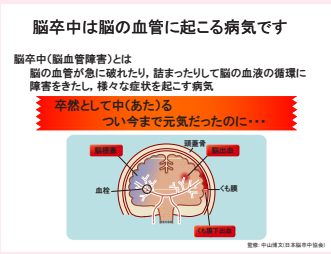
2）脳卒中の治療は、早く発見して早く適切な治療が開始できれば、死亡率や後遺症を軽減出来ます。日頃から、近所の脳卒中専門病院を把握しておいて下さい。

3）脳血栓は血栓を溶解する治療を規定時間内（4.5時間以内）に開始できれば、後遺症をほとんど残さずに完治できる可能性が大幅に高まるとされています。

4）脳血栓は血管の中から血栓を回収する治療もあり、その治療が出来る「脳血管内治療医」がいる病院で適切な治療が出来れば、大きな後遺症を軽減できる可能性が高くなると言われています。

5）脳卒中が起こっても、その後の積極的なリハビリテーションで、ほとんど元通りに治る方もおられます。最近では、脳卒中の専門リハビリテーションである“ニューロリハビリテーション”が脚光を浴びて来ています。

6）脳卒中が良くなっても、再発すると大きな後遺症を残したり致命傷になったりします。再発予防のため、内服の継続、食事の管理、生活環境の改善、メタボリックシンドロームからの脱却などで、再発の危険から大きく回避できます。

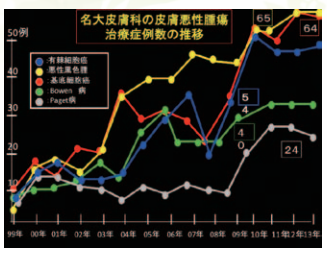


世界中で発生している脳卒中が早期発見・早期治療で、多くの人の命を救おうというキャンペーンのために、世界が一つになって立ち上がった日です。みなさん、自分が脳卒中にならないように、なったらどうすればよいかを日頃からいろいろと気をつけておきましょう。

診療科レポート「皮膚科」

教授　秋山　真志

皮膚に見られる症状や変化は全て皮膚科医の守備範囲です。たとえそれが内科的な病気によるものであっても、最初に診断、評価するのは皮膚科です。皮膚科で拝見する対象となる病気としては、メラノーマ、基底細胞癌などの皮膚の悪性腫瘍、ＳＬＥや皮膚筋炎などの膠原病、色素異常症や魚鱗癬などの皮膚の遺伝病、アトピー性皮膚炎、乾癬、蕁麻疹などがあります。特に、皮膚癌の治療症例数では、名大病院皮膚科は全国的にもトップクラスです。悪性黒色腫（メラノーマ）を中心に、有棘細胞癌、外陰部のパジェット病、基底細胞癌などに対して、外科的手術、化学療法、分子標的薬剤、放射線療法を組み合わせて治療計画をたて、最先端の治療を行っています。皮膚癌の患者さんの予後には、リンパ節転移の有無がとても大きく関係するので、リンパ節転移の有無を調べる検査、センチネルリンパ節生検に力を入れており、センチネルリンパ節の検出精度をより高めるためにパテントブルーという色素を用いたＲＩ法、放射線同位元素を用いた色素法、赤外線カメラを使用した蛍光法の３つの方法を併用しています。皮膚腫瘍以外では、膠原病の診療においても名大病院皮膚科は長い歴史を持っています。また近年は、種々の生物学的製剤を用いた乾癬の治療も積極的に行っています。



治療症例数

手術室にて

ナディック通信

Nagoya Disease Information Center

ナディックでは毎月第３週目の月曜日に、ちぎり絵教室を開催しています。

和紙や新聞紙などを使用し、思い思いに作品を作ることが出来ます。ボランティアさんが作り方を教えてくれますので誰でも参加が可能で、事前の予約も必要ありません。

10月には季節に沿ったテーマでみなさん素敵な作品を作る事が出来ました。

他にも手作り教室、音楽療法、ビデオ上映会などのイベントを定期的に開催していますのでお気軽にご参加ください。

各イベントの開催日については院内の掲示をご覧ください。

ちぎり絵教室　**開催場所**　中央診療棟２階　広場ナディック内
開 催 日　毎月第３月曜日　13：30～

ナディック利用時間
平日（月～金）10時～16時（年末年始及びゴールデンウィーク除く）

TOPICS 特集 3

名大病院歴史探訪 其の6

名大病院の始まりは、1871（明治４）年に旧名古屋藩評定所跡に設けられた仮病院です。
2014年に鶴舞町への移転百周年を迎えた名大病院の歩みを医学部史料室（医学部図書館４階）の所蔵品によりご紹介します。

磁石と鋼鉄との親愛なる関係 ―ローレツ④―

1880（明治13）年４月、愛知県公立病院及び医学校の教頭であったローレツ(Albrecht von Roretz 1846-1884)は、前年に１年延長されて４年間となった任期が満了となり、愛知県を離れることになりました。県令（県知事）、官吏、病院と医学校の職員や在校生らは、腕車（人力車）120台余りを連ねて、ローレツを熱田まで見送り、水月楼で送別の宴を開き、訳官兼教諭の田野俊貞に横浜まで送らせました。この時、病院兼医学校長代理であった後藤新平は、別れの挨拶の中で、ローレツの再度の任期延長を懇請したことを明らかにし、ローレツを医事衛生上の磁石、生徒や職員を磁化されるべき鋼鉄とたとえて、両者の親愛なる関係に感謝しています。

ローレツは宴の席で“Quidquid agis prudenter agas et respice finem.”というラテン語の格言（図１）を残しました。これは、中世のキリスト教説話集“Gesta Romanorum”（ローマ人行状記）の第103話にあり、田野は「汝毎事必慮、而後可行、焉常無忽其終」と漢訳しています。第103話は、皇帝ドミティアヌスが商人から３つの格言を買う話です。その中のひとつが、ローレツが残した「何事も慎重に行って、その結果を考えよ」で、皇帝はこの格言を宮殿内の彼が普段通るあらゆる場所に書きつけさせて、テーブルクロスにまで縫い込ませました。ある時、皇帝の殺害を企んだ者が皇帝お抱えの床屋を買収し、皇帝のひげを剃る時にのどを掻き切らせようとしました。床屋は、金を受け取り、皇帝のひげを洗い剃刀を当てて、ふと下を見たところ皇帝の首に巻いたタオルの「何事も慎重に」という格言が目に入り、自分はきっと死刑になると考え、手が震えて剃刀を落としてしまいました。こうして皇帝は、３つの格言を守ることで、次々と計画される殺害計画から逃れることができた、というお話です。

愛知県を離れたローレツは、1880年４月末に金沢医学校、同年９月には山形県の済生館医学寮に招かれ、教頭として講義や治療に当り、東北地方ではじめて開腹手術、眼科手術に成功しました。『黴毒學』（図２）は、ローレツの講義を朝山義六が訳したものです。朝山は、1876年に愛知県公立医学講習場係となり、1877年４月以降は司馬凌海の後任の訳官代理を務めていて、ローレツが山形に着任後、訳官として呼び寄せられました。ローレツは、1882年に日本を離れ、ウィーンのサナトリウムの病院長となりますが、心臓まひのため急逝しました。まだ37歳という若さでした。

（医学部図書館　蒲生英博）

図１　惜別の辞　1880年

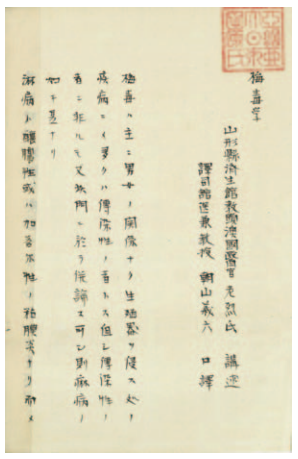


図２　『黴毒學』　1881年頃

■ミニニュース

「コンサート」を開催しました。

中央診療棟２階ピアノ広場にて、９月13日(火)に『名工大吹奏楽団』、９月26日(月)に『まほろば遊さん、ウォーレン・オルストンさん、リカさん』、10月11日(火)に『めぐみの会』の方々によるコンサートを開催しました。

季節を感じる曲目や話題の曲目など、多くの皆様が楽しいひとときを過ごされました。

９月13日に行われたコンサート

９月26日に行われたコンサート

10月11日に行われたコンサート

病院からのお知らせ　提案書からの改善報告

本院では、患者さんへのサービス・アメニティー等の満足度向上を目指し、患者満足度委員会において、院内に設置してある提案箱へ投函いただいたご提案からのサービス改善策を検討し実施しています。

現在１ヶ月あたり約100件のご提案をいただいており、提案書を回収次第、患者さんのご意見の速やかな検討を現場で行うとともに、その後委員会にて、いただいた提案書の１件、１件に対する対応策の検討を行うことで、サービス改善を実施しています。

サービス改善における主な内容については、外来棟１階中央待合ホールに設置されているモニターへの掲示により、患者さんへお知らせしています。

患者さんが利用する設備や機器などは、日々における点検や更新を実施しておりますが、平成28年度上半期では、以下の改善を実施しました。

（院内における主な設備面の改善）

１）小児病棟に乳児用・幼児用２タイプのベビーカーを配備。
２）外来棟の掛け時計をより精度の高いものに更新。
３）採血待合室のベンチを増設。
４）外来棟玄関に点字ブロックを整備

（院内における主な運用面の改善）

１）外来ボランティアの火曜日午後の活動を開始。
２）来院者の安全確保の為、外来棟エスカレーターに利用上の注意を明記。
３）外国語話者のために、総合案内に翻訳用端末を配備。（英語、北京語、スペイン語、ポルトガル語の４か国語に対応可能。）

外来棟玄関
点字ブロック

外来棟エスカレーター
利用上の注意書き

携帯電話及びスマートフォンの使用について

名大病院では、医用電気機器への電波影響を防止するとともに、迷惑通話を防止し、静かで落ち着いた院内環境を保持するため、携帯電話及びスマートフォンの使用について必要な事項を定めています。詳しくはホームページでお確かめください（http://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/1385/1512/goraiinnominasama.html）。

なお、通話は、「通話可能エリア」及び公衆電話 BOX に限って可能です。付近の方々へ迷惑にならないように、ご配慮の上ご利用ください。ご理解とご協力をお願いいたします。

■ 禁煙のお願い

患者さんの健康をサポートすべき医療施設として、
病院敷地内の全面禁煙を実施しています。
皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

特集 TOPICS 4

医療の安全性・効率性を高める情報の集約と標準化を先導。

名大病院では電子カルテの情報システムを継続的に更新してきました。平成30年1月1日に稼働する第7次システムでは、全国の先駆けとなる大規模なシステム改革を予定しています。その先進的な内容について、メディカルーITセンター長の白鳥義宗病院教授に伺いました。

使いやすくわかりやすいシステムへ

本院では患者さんの診断内容や検査画像をコンピュータに保存し、電子カルテとして管理しています。しかし、これまで診療科や検査部門が各自でデータ管理のシステムを導入してきたため、院内には100以上のシステムが乱立し、部門間での情報共有の壁となっていました。この問題の抜本的な解決を目指すのが、平成26年から準備してきた第7次システムです。

第7次システムではシステムを一元化し、すべての情報を集約管理します。国内で本院クラスの大規模な総合病院がシステムを一元化した例はなく、先駆けとなる取り組みと言えるでしょう。また、一元化にあたり、医療データの書式も標準化します。それによって誰が見てもわかりやすく、使いやすいものになるからです。

医療ミスを防ぎ、受診がより快適に

医療データの集約と標準化は、医師はもちろん、患者さんにも大きなメリットをもたらします。例えば、バラバラだった複数の診療科の検査画像を一画面で確認できるようになるので、検査結果の見逃し防止につながります。また、血液検査の値に応じてコンピュータが他の検査を行う際の注意事項を画面に表示することで、医師の注意を喚起できます。

さらに、点滴や注射の際には、その患者さんで間違いないか、人とコンピュータがダブルでチェック。その後も抜けやミスがないか、主治医・診療科・病院が3段階で確認できる流れを構築する予定です。

情報を共有し複数のチェック機能が働くことで、これまで主治医一人に頼ってきた確認が強化され、より安全でより良い医療を患者さんに提供できるようになります。加えて、検査の重複を防ぎ、外来診察や会計もスムーズになるなど、待ち時間も短縮できるものと考えています。

未来の医療の土台をつくるために

医療界全体で見れば、全国で医療データの集約・標準化が進めば、大量の情報の比較・集計ができ、それをもとにした新たな医療の発見が期待できます。本院では院内の情報共有化とともに、他の大学病院と連携して標準化を先行しようとしています。

平成30年1月1日に第7次システムが稼働すると、1年後には早くも8次システムの検討が始まります。8次システムでは、いよいよAI（人工知能）の導入が予想されます。AIを活用する土台としてデータの集約は不可欠であり、本院は先手を打って未来の医療に備えています。

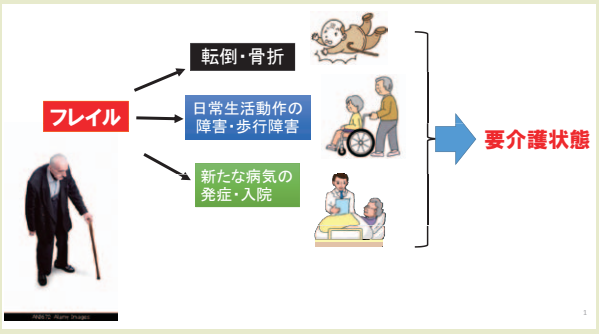
健康講座

「高齢者の虚弱（フレイル）って知っていますか？」

老年内科　教授　葛谷　雅文

高齢者と言っても幅広いですが、特に後期高齢者（一般には75歳以上を指します）では健康障害につながる特有の現象があります。それを「虚弱」、最近では「フレイル」と呼びます。実際には、徐々に1）体重が落ちてきた、2）疲れやすいと感じる、3）外に出て運動とか体操など体を動かす機会が減った、4）歩く速度が遅くなった（例えば、信号を青で渡り切れない時があるなど）、5）力がなくなった（例えば、ペットボトルのキャップが開けにくい、など）、の症状が3つ以上当てはまるとフレイルと診断され、1つまたは2つの場合はフレイル前段階と診断されます（表を参照）。この状態を放置しておくと、転びやすくなったり、病気にかかりやすくなったり、要介護状態になりやすくなったりすることがわかっています（図を参照）。

この状態は予防することも、また元気に戻ることができることが分かっています。まずはご自身がこの状態に気が付くことが大事です。また、それ以外に何らかの病気が隠れていることもあります。気になるようでしたら、かかりつけ医、または名大病院の主治医に相談してみてください。老年内科ではそのような患者さんの相談に乗らせていただくこともできます。フレイルに気を付けて、一日でも長く健康寿命を保つようにしましょう。



フレイルを放置すると

表．フレイル指標

項　目	指　標　の　例
1．体重減少	意図しない半年間で２～3kg 以上の減少
2．疲労感	（この２週間に）わけもなく疲れた感じがある
3．活動量の低下	散歩・運動など一週間に一回以上していない
4．歩行速度の低下	以前に比べて歩く速度がおそくなってきた 信号が青で渡り切れないことがある
5．筋力低下	ペットボトルのキャップが開けにくい

上記の５項目の内、３項目当てはまればフレイル、１～２項目ならプレフレイル（フレイル前段階）

平成28年度鶴舞公開講座を開催

11月19日（土）、中央診療棟３階講堂において、平成28年度鶴舞公開講座を開催しました。同講座は、平成17年度から、医学部と附属病院が共催で、年１回開催しているものです。社会的に関心が高く、日常で役立つ話題をテーマとしています。今年度は、「“がん”最新スタンダード　～予防・治療・暮らしの観点から～」と題し、「がんを防ぐ、がんを早くみつける」「知って納得、がん治療」「がん相談と暮らしのサポート」の３つの講演を行いました。いずれの講演でも、先生方が時折ユーモアを交えてわかりやすく紹介し、和やかな雰囲気の中、受講者の皆さんは熱心に耳を傾けていました。

当日は、リピーターを数多く含む20代から80代の幅広い年齢層約200名が受講し、受講者からは、大変参考になった、来年以降もぜひ参加したいという声が多数聞かれました。

■ ボランティアさん募集

当院ではボランティアさんを募集しています。
詳しくはホームページをご覧ください。

● ボランティアホームページ
http://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/1411/volunteer.html

名大病院 かわらばん　筆 石黒 直樹
No.103　医学部・医学系研究科総務課
TEL 052-741-2111（代表）
発行日　2017年1月1日

かわらばん HPのご案内
「かわらばん」は、名大病院ホームページでもご覧いただけます。
バックナンバーや災害医療支援活動の状況、医事統計などを掲載しています。
ホームページアドレス　http://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/（トップページ⇒名大病院かわらばん）